

## 資 料

パ                      リ  
—— 誕生から現代まで ——  
[XVII]

P. クールティヨン      著  
金   柿   宏   典\*   訳注

## ルイ 16 世とフランス大革命（4）

この動乱の真っ只中であっても、大多数のバリ市民たちは自分のささやかな家業にいそしみ、グルック<sup>1)</sup>の『アルミド』<sup>2)</sup>を聞きにオペラ座に行き、ダレラック<sup>3)</sup>の『狂恋のニーナ』を見物するためオペラ・コミック座に通ったのである。これに反し、国立劇場のテートル・フランセの役者たちの多くは投獄された。（カンカンボワ街<sup>4)</sup>の）モリエール小路<sup>5)</sup>の「サン・キュロット座」<sup>6)</sup>には、『貴族の犯罪』のポスターが貼られる。「トロワ・ボシュ」書店で、人々は『デュシェヌヌ親父の暦』を買っていた。流行はバレ・ロワイヤルで、そのギャラリーは何時も雑踏し、その情景をドビュクール<sup>7)</sup>が描くことになるだろう。同じバレ・ロワイヤルの 123 番地にあるヴァロワ・ギャラリーの地下倉は野次馬連中が見物に行く所になるが、ここはル・ペルティエ・ド・サン・ファルジョー<sup>8)</sup>が国王の死刑に賛成票を投じた後に暗殺された所である。4 時になると人々はサン・トノレ街に陣どり、死刑台に連行される死刑囚の馬車を見物する。

市民リヴィエールは、衛生係士官で、黴菌を告発する本を出版する。街路は不潔で、「野良犬たちがまき散らす汚物にまみれている」。板を手にした少年たちは、数スーの金をもらい悪臭を放つ汚水の水溜りを渡る手助けをする。通りや地区はそれぞれ専門店街を持

---

\* 福岡大学人文学部名誉教授

つに至った。サン・ドニ街とサン・マルタン街は頭布や靴下や編物類製造販売店と小間物商店、フォーブール・モンマルトル<sup>9)</sup>は布地類の中心、フォーブール・サン・タントワヌ<sup>10)</sup>は家具商と紙問屋街である。シャイヨー<sup>11)</sup>は鉄工所と製糸工場、ルール<sup>12)</sup>は屑屋街である。貧困層の中心は互いに癒着し合ってやがてオスマン大通り<sup>13)</sup>に成長していく。

たちじゃこう草かいぶきじゃこう草の小枝をボタンホールに挿して、人々はモンタニャール派を自称する。三色の懸章は聖なるものとなる。芸術家たちは著作の書いたままで使われなかった断片で生活しており、文章の冒頭を諸々の宣言の唐草飾りで飾っている。サン・ジェルマン大通り<sup>14)</sup>には最早四輪馬車は見当らない！ 大邸宅には人影はないかあるいは政府に徴発されている。娘たちは教会を占拠する。サント・シャペルは記録保管所になった。椅子職人たちは、サン・ルイ島<sup>15)</sup>のランベール館<sup>16)</sup>に入り込む。忠義、理性、フリーメイソン<sup>17)</sup>の印がいたる所であらゆるものの上に見られる。正三角形、最高存在の目、バラ十字会<sup>18)</sup>の印、太陽の騎士たち、聖堂騎士団、ヴォルテールやルソーやスヴェーデンボリ<sup>19)</sup>やクロード・ド・サン・マルタン<sup>20)</sup>の「精神人間」の信奉者たちの印である。

テニールス<sup>21)</sup>の絵やグルーズ<sup>22)</sup>の肖像画を賣っている店にボワリの魅力的な小品が現れる。彼は国民公会時代の綺麗な女性の散策の姿を描いていた。たっぷり縞子を使い、三角形の肩掛けをはおり、ウェストラインを上にあげ、首にゆったりと寒冷紗のスカーフをまき、小さなパンプスを履いている。スカートをふくらました輪骨入りのペチコートのパニエや長く曳きずる裾は姿を消す。高く結い上げた髪は流行遅れになった。襷のないほとんど平らなスカート、後が尖ってそり返った帽子が人気を集める。単純さがとって代ったのである。

貴夫人たちがショールを軽蔑し始めたのは、快活な庶民の女たちが身につけ始めたからである。彼女たちは山の高い帽子を被っていたが、その縁は円くて麦藁製で、羽根やしばしば三色のリボン飾りがついていて。男たちはすっきりした服を着ていたが、胴の部分が長く裾先は膝までであった。

社会では、特権が消滅しつつあった。人々は声高く議論し熱中した。女性たちは時折気紛れや怒りで醜くなった。「この大革命には我慢できん、私のパリを壊してしまった」とセギュール伯<sup>23)</sup>は言った。「しかし、とこの言葉を伝えている回想録作者の彼の弟<sup>24)</sup>は言っている。すべての人が多かれ少なかれそこで働いていたんですよ。或る者はパリを腰まで届くように、また或る者は腹まで届くようにしてやったんですよ」。

ロバスピエールの失脚後、反動が始まる。ジャコバン派から、権力は穏健派に移る。独

裁政治は消滅する。カトリックが復活する。しかし人々は、食糧の欠乏と特にひどかった冬の寒さから、自分たちを飢えさせた国民公会を非難して決起した。議会は何度も侵犯される。共和暦3年牧月1日(1795年5月20日)の暴動<sup>25)</sup>は、その期間にテロリストたちが権力を奪還しようとして、重大な特色を持っていた。議会はその夜おそくなってやったと解放されたが、代議士のフェロー<sup>26)</sup>は、議長ボワシー・ダングラスを庇おうとして殺害された。

この劇的な暴動の後、政府はフォーブール・サン・タントワヌ地区を武装解除し、革命裁判所を廃止する。これ以後はブルジョワ階級の中からしか、国民衛兵は徴集されなくなる。

1793年には投票された共和暦元年の憲法は、より民主的でない共和暦3年の憲法に取り替えられたが、これが新しい混乱を惹起する<sup>27)</sup>。ルイ16世の子の皇太子<sup>28)</sup>がタンブル塔の獄屋で死亡もしくは行方不明になった悲報に興奮した王党派が、ルイ18世<sup>29)</sup>を名乗った王弟プロヴァンス伯の周囲に結集し、恐怖政治が再開されるという風説を流し、国民公会に対するブルジョワたちの反感を煽ったのである。パリの町は再武装する。そして叛乱が宣言される。マラーの遺体がバンテオンから運び出される。デモ隊は革命派狩りを開始する。葡萄月13日(10月5日)、王党派が国民公会に叛乱を起し、議員たちのいるチュイルリ宮を攻撃した<sup>30)</sup>。だがナポレオン将軍の率いる議会派の軍隊に霰弾の砲撃を受け、大損害をうけて排除されるが、特にサン・ロック教会<sup>31)</sup>の正面玄関前で多くの死者が出た。1795年10月26日、3年間の議事後、国民公会は自分の任務の終了を宣言したのである。

(続く)

パ リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XVII)

1) Christoph Willibald Gluck (1714-1787) : ドイツのオペラ作曲家。プラハ (1732), ウィーン (1736), ミラノで学び, ここでイタリア歌劇風のオペラを発表し好評を得た。1745 年パリに短期間滞在した時にラモールの作品に接した。ロンドンに招かれ (1745), 新作を発表するが不評のため落胆。彼はここでヘンデルと会っている。1748 年にウィーンに定住しハプスブルグ王宮の礼拝堂監督となる。彼はこれまで手がけてきたイタリア歌劇の弱点, 声楽の技巧にあまりに重点を置きすぎる点を克服し, 新様式のオペラを創造しようとする。彼は単純で古典的かつ劇的な展開を目指し, 詩と音楽の緊密な結合を実現した。「音楽家よりも詩人であり画家」であろうと努力したのである。ウィーンで成功した彼は, 当時ヨーロッパの芸術の都であるパリでの成功を求めて来仏する。彼は王妃マリ・アントワネットの後援を得て, 1774 年 4 月 18 日, フランス様式の最初のオペラ『アウリスのイフィゲネイア』*Iphigénie en Aulide* を上演, 続いて 8 月には仏訳したオペラ『オルフェ』*Orphée* を発表し, 大好評を博した。『アルセスト』*Alceste* (1776), 『アルミド』*Armide* (1777), 『タウリスのイフィゲネイア』*Iphigénie en Tauride* (1779) を次々と上演して, パリ市民の熱狂的アイドルになった。しかしながら彼の改革的オペラを非とする人々が, 当時パリに王妃マリ・アントワネットによって招待されていたイタリアの歌劇作者ニコロ・ピッチーニの作品をグルックの作品に対抗させ, 両者の優劣論争が起った。グルックの作品の方が優れていたのは当然だったのだが, 彼はこの論争に嫌気がさし, ウィーンに帰り (1779), 二度とパリの地を踏むことはなかった。

2) *Armide* はイタリアの叙事詩人タッソ (1544-1595) の叙事詩『エルサレムの解放』*La Gerusalemme liberata* (1580) に登場する魅力溢れる美女で十字軍の騎士ルノーを誘惑し, 彼に聖地奪還の任務を忘れさせる。彼女はこの後も多くの劇や詩や画の題材にとりあげられ, グルックの作品もその一つである。

3) Nicolas Dalayrac (1753-1809) : オート・ガロンヌ県ミュレの旧家の生れで 14 歳になるまでにトゥールーズの学校で勉強を終了した。この学校の校長が少人数の音楽サークルに彼を招いた事が, 彼に音楽愛好心を喚起した契機といわれる。賞状を父に渡した時, 彼が御褒美としてねだった事がヴァイオリンの勉強だといわれる。しかし彼にはその才能

がなく親からその楽器に触れる事を禁止されてしまう。この間に法律の勉強をして弁護士  
の資格をとるが、法廷は全く彼の性格にあわず、諦めた父は彼をアルトワ伯の警備隊に入  
隊させた。かくして彼は1774年に上京する。勤務地のヴェルサイユからパリまで歩いて  
彼がオペラ見物に行ったのは、馬車の乗車賃がなかったからである。ヴェルサイユには楽  
士たちやイタリア人俳優たちがよく招待され国王一家の前で演奏したり劇を上演したが、  
このコンサートや芝居には勤務時間をやりくりして彼は必ず出席していた。しかし偶然に  
も当時有名な音楽と作曲の教師ラングルと知り合い、作曲の授業を受けることができたの  
である。彼がイタリア人の仮名で発表した処女作は好評で、これが作曲家としてのスター  
トになった。彼はオペラ・コミックの巨匠として、1781年以降死ぬまでに60曲以上の作  
品を発表した。テキストでは *Nina la folle* となっているが、正確には *Nina ou la folle  
par amour* で一幕物のオペラ、作詞はマルソリエで、1786年5月5日、コメディ・イ  
タリエンヌ座で初演されている。『サヴォワの2少年』 *les Deux petits savoyards* は初演  
が1789年5月14日で一幕物のオペラ・コミック、作詞は同じマルソリエでコメディ・イ  
タリエンヌ座である。これが代表作とみなされている。

4) rue Quincampoix : 第3区と第4区を走る道で、ロンバル街とオー・ズール街を  
結ぶ長さ452米、幅3米がから10米の道路。幾つかの道路を吸収合併して現在の通りにな  
ったのは1851年だが、この名前は1203年に *Quiquenpoist* として記録に出ている。  
開通以来、道幅がほとんど変わっていないため、大部分の家屋は17世紀から18世紀のも  
のである。この通りの22番地に初代のパリ警視総監ニコラ・ド・ラ・レニが住んだ。  
1667年ルイ14世によって創設されたこのポストに着任した彼は、道路の清掃、街燈の設  
置、巡回の強化を実施し、「奇蹟御殿」と呼ばれていた悪者たちのアジトを一掃し、首都  
の治安を確保している。また54番地には有名なキャバレー「木刀館」 *l'Epée de Bois* が  
あり、マザラン公認の楽団と舞踊団が公演していたが、これが後のオペラ座の音楽アカデ  
ミーの母胎となっている。また65番地の旧ヴァンドーム公の館「ボフォール館」 *l'hôtel  
de Beanfort* に、1719年にジョン・ローが銀行を開設、アメリカにおけるフランス植民  
地の開発のため「ミシシッピ会社」を設立して投資を呼びかけ、やがて紙幣濫発によりフ  
ランス経済界に大混乱を惹起するという大恐慌の発生源になったのも、この通りである。

5) passage Molière : 第3区にあり、サン・マルタン街とカンカンボワ街を結ぶ長さ110  
米、幅2.75米の小道。この小路は「モリエール座」の創立者で昔マルセイユで劇場を経  
営していたブルソールが、役者たちの出入口を設けるために1791年に造成した私道で

ある。1793年にサン・キュロット小路と改称されたが、大革命の終結と共に旧称に戻った。

6) théâtre Sans-Culottes : カンカンボワ街 82 番地にあった劇場で、1791年にブルソールにより創立され、その当時は「モリエール座」théâtre Molière と呼ばれた。この劇場はそれまでに類を見ない豪華な建物で、栈敷席が3列、平土間と鏡で飾られた通路を備えていた。柿落しは1791年6月4日、モリエール作の『ミザントロープ』*Misanthrope* 上演で開幕した。革命が進展した1793年にサン・キュロット劇場と改称された。この劇場は何度も名を変えて開場閉場を繰り返し、最後はドイツ、イギリス、スペインなどの外国物を上演していたが、ナポレオンの文化政策により1807年に閉鎖を命じられ終末を迎えた。現在でも82番地の綱製造販売の商店の中に栈敷席とギャラリーの一部が残っている。

創立者の Jean-François Boursault (1752-1842) はパリのラジャ商の家に生れたが、はやくから巡回劇団に身を投じ喜劇役者として人気を博した。マルセイユやパレルモで劇場を経営したが借金で行き詰り自殺寸前に追い込まれたが、ファンだった国王が借金を払ってくれ一命をとりとめた。パリに帰りモリエール座を設立し好評を博し、次に国民公会に選出され政治の世界に入るが、何度か政争に巻きこまれ命を失う危険に襲われ、政治家は不向きであると悟って、演劇界に立ち戻っている。劇場経営はあまりうまくいかなかったが、区画整理など立退きの補償で大金を得てから趣味の園芸にいそしみ、ブランシュ街の彼の庭園は当時ヨーロッパで最も有名な庭園の一つになった。彼はその他にも見事な画廊を経営し、安楽な晩年を送った。

7) Philibert Louis Debucourt (1755-1832) : パリ生れの画家、彫刻家。ヴィヤンに学び、1782年に絵画アカデミー会員となり国王専属のお抱え絵師。1785年頃から彫版に没頭したのはイギリスからの見事な版画に接したためである。彼はこの分野でも成功し、彼の絵画と同じく蒐集家の垂涎の的になっている。また彫版のアクァチントも製作し同様の成功を得ている。国立図書館に2枚の彼の大作が展示されている。その他の代表作は『パレ・ロワイヤルの散歩道』*Promenade au Palais-Royal*, 『村の婚礼』*Noce de village* などである。

8) Louis Michel Le Peltier de Saint-Fargeau (1760-1793) : パリ高等法院の次席検事ついで同法院の裁判長を務めた。1789年の三部会では貴族部会の議員に選出されたが革命派に加入し、国民公会議員としてルイ 16 世の処刑に賛成票を投じた。しかし国王の

処刑前夜 (1793. 1.20), パレ・ロワイヤルのレストランでパリ近衛騎兵隊員によって暗殺された。彼の遺体は豪華な葬列に送られパンテオンに安置され、遺児の娘は国民公会に採用された。

9) rue de Faubourg-Montmartre: 第9区にありモンマルトル大通りとラマルチース街を結ぶ長さ 635 米, 最小幅 20 米の通り。この道はシテ島からモンマルトルの丘に通じる古い道の一部で、大革命時代に Faubourg-de-Montmarat と呼ばれていた。

10) rue de Faubourg Saint-Antoine: 第11区と第12区にまたがり、シャラントン街とナシオン広場を結ぶ長さ 1,810 米, 幅 17 米から 20 米の道。1632 年まではサン・タントワヌ門からサン・タントワヌ修道院を結ぶ土手道で、この修道院を過ぎるとヴァンセンヌ街道 Chemin de Vincennes と呼ばれた。この通りには多くの横町があり、家具職人たちの住居が密集していた労働者街でもあり、パリでの暴動の温床だった。また彼らは 1471 年にルイ 14 世の勅令により自由に生産する事を公認されていた。

11) rue de Chaillot: 第16区にあり、ピエール一世大通りとマルソー街を結ぶ長さ 320 米, 最小幅 12 米の道。この道は昔のシャイヨー村の林道でルールに通じていた。シャイヨー村は6世紀に既にセヌ川とルールの丘 (現在のエトワール広場) の間にあったニミオ村として記録されている。セヌ川とパリを見渡す絶好の場所のためパリ市が膨張してくるにつれて貴族やブルジョワの別荘地になった。

12) rue de Roule: 第1区にあり、リヴォリ通りとサン・トノレ街を結ぶ長さ 116 米, 幅 10 米の道。この一帯は昔のルール封地でその役所がこの街路とフォッセ・サン・ジェルマン街の角にあったので、この名がついた。大革命時代、コンシエルジに収容されていた死刑囚を革命広場の処刑台に運ぶ馬車がこの道を通った。

13) boulevard Hausmann: 第8区と第9区にまたがり、ドルオ街とワシントン街を結ぶ長さ 2,530 米, 幅 30 米から 33.5 米の大通り。1857 年に部分開通し、何回か延長工事が行われ、1927 年に現在の姿に完成し、落成式にはドームルグ大統領も出席した。40 番地にはデパートのギャラリー・ラファイエット、64 番地には同じくル・ブランタンが軒を連ねる繁華街である。プルーストが 1906 年から 19 年まで 102 番地に住んでいる。

14) boulevard Saint-Germain: 第5区, 第6区, 第7区にのびるセヌ川左岸を東西に走る幹線道路で、ラ・トゥールネル河岸からアナトール・フランス河岸を結ぶ長さ 3,150 米, 最小幅 30 米の道路。1855 年に着工、1866 年に完成した。この通りには観光客にも人気のあるカフェやビヤホールが並んでいる。151 番のブラッスリ・リップは 1870

年の創業で、パリの文化人の蝸集する店として有名。170 番地のカフェのドゥー・マゴは 1873 年に此処に移転してきた店で、この店も文化人や知識人の客が多い。172 番のカフェ・ド・フロールは第 2 帝政末頃の開店で有名な詩人たちが常連だったし、第 2 次世界大戦後はサルトルらの実存主義者たちの集まる店として世界的に有名になった。

15) L'Ile Saint-Louis：第 1 区にある小島でシテ島の上流に位置し、セーヌ川に囲まれている。昔は île aux Vaches と île Notre-Dame の 2 つの小島だったが、ルイ 13 世の治世の初め、実業家のクリストフ・マリが金融業者のプートリエとルグラティエと共同でこの 2 つの小島を連結し、更に 2 つの橋をかけて右岸と左岸をつなぎ、分譲地を造成する計画の認可を得た。工事は 1627 年から始まり 1664 年に完成する。この場所は都心で交通の便もよく、しかも閑静で田舎びた雰囲気があったため、住宅地として人気が高まり、多くの大貴族が豪華な大邸宅を建築した。現在でもパリ随一の高級住宅地である。

16) Hôtel Lambert：サン・ルイ島の中心を上流から下流にかけセーヌ川の流れに沿って横断するサン・ルイ・アン・イル街の 2 番地にある。この館は貿易商 Jean Baptiste Lambert の依頼で、当時の名建築家ルイ・ル・ヴォー（1612-1670）が設計し、内部装飾を画家シャルル・ルブラン（1619-1690）とユスタッシュ・ルシュール（1617-1655）が手掛け、1644 年に完成した。その豪華さはサン・ルイ島の豪邸のなかでも一、二を争うものである。邸宅はその後何度も転売され、多くの所有者が住むが、1742 年の夏、当時の家主シャトレ伯爵夫人が恋人のヴォルテールと滞在している。1831 年に独立運動に失敗しロシアにより祖国ポーランドを追われたアダム・チャルトリスキ（1770-1861）がパリに亡命し、1843 年にこの館を入手し、現在も彼の子孫が住んでいる。

17) Franc-Maçonnerie：世界的な規模を持つ一種の秘密結社。自由と寛容を基本理念に、真理の探究と人間性の完成を目指す。会員はそれぞれ秘密集会所 loge に所属する。この結社の起源は謎で、古くはソロモン王によるエルサレム神殿の建築に端を発するという説から、エジプトやギリシャの神秘思想、キリスト教誕生の頃のグノーシス派や、更に聖堂騎士団やバラ十字会などの秘密教団から派生したとする説まである。しかしながら中世の石工組合が根源であるという説が確実といわれる。最初の階級も石工たちのそれと同じく、徒弟 apprenti、組員合 companion、親方 maître から発し、結社のシンボルも石工の道具である皮製のエプロン、鋸、直角定規、コンパスであった。しかし時代と共にメンバーは、特に英国では貴族たちになり、結社の組織も拡大強化され、社会各層に対して陰然たる影響力を及ぼすに至り、会員になる事は多くの特権を享受する保証になった。ロンドン



本部の会員からはジョージ5世、エドワード7世ら4人の国王を輩出したほどである。このロンドン本部から来仏したダーウェトウォーター伯爵により1725年頃パリにフリーメイソンが紹介され、1732年にパリ本部が設立された。この結社は多くの進歩的な貴族を魅了して加盟させたが、その中にはやがて大革命で処刑されるオルレアン公爵フィリップ・エガリテもいた。自由と寛容、真理の探究と人間性の完成を目標とするフリーメイソンの思想は、フランス大革命の精神的準備であり、急速にフランス全土に普及し、1777年には約825の支部が生れたという。これ以後何度も浮沈を経験するがフリーメイソンは現在も存続し、キリスト教との共存を模索している。

18) Rose-Croix：フリーメイソンと同系列の秘密結社で、バラと十字架はそれぞれキリストの再生と贖罪を示している。この結社の起源は謎で、一説にはドイツのプロテスタントの牧師でヴェルテンベルグの神学者ヴァレンティン・アンドルー（1654年歿）が、神秘主義者たちを嘲弄するために書いた小説がそれであるという。この小説の主人公クレティアン・ローゼンクーズ（Rose-Croix）が20歳の時に東方を旅し、ダマスカスでその地の魔術師に貴方こそ世界を改造する天命を持った人物だと啓示され、秘法を伝授される。彼は106歳で歿するが、遺言として世界救済の法を残していく。自然の神秘の探求とキリスト教の神秘的意味の解讀を目的とした教団を設立しようとしたローゼンクーズの主張は、小説の中のフィクションであるにもかかわらず、これを真剣に受けとめ、その目的を実現しようとした人々が中心となり結成された組織が「バラ十字会」だという。この結社は17世紀からドイツ、イギリス、フランスに広がっていく。新入会員は入会に当たって忠誠と秘密の厳守ならびに規約の命じる会の使命を実行する事を誓約しなければならなかった。そのうちのよく知られているものは、医術を施しても報酬は一切もらってはならないとか、自分のいる国の習慣を順守して生活せよとか、年に一度は総会に出席すべしとか、死の前に適当な後継者を選定しておくべしなどで、特に注目すべきものはない。但し自然の神秘の解明の努力が錬金術と化金石の発明に主として注がれた事はこの会の特色といえよう。デカルトやライプニッツなどもこの会に関心を寄せたといわれる。しかし時代がさがるにつれて浮世ばなれした彼らの神秘的思想は、フランスなどでは一般の庶民から嘲笑され、ヴォードヴィルなどに取り上げられ茶化されてしまい、18世紀の末頃には自然消滅したらしい。

19) Emanuel Swedenborg, 本名 E.Svedberg (1688-1772)：スウェーデンの哲学者、神秘主義者。プロテスタントの神学者で司教であった父を持つ。ウプサラ大学で数学や生物

学を学び、1710年から14年かけ、英国、オランダ、フランス、ドイツを旅行し見聞を広めた。帰国後に鉱山局官吏となり（1716）、才能を発揮し、スウェーデンとノルウェーとの戦争に際して舟艇運搬機を発明し、女王ウルリカ・エレオノーラ（1688-1741）により貴族に列せられ（1719）、終身上院議員になった。しかし1743年頃に視霊の体験をしてから心靈研究に没頭するようになる。彼は、宇宙には精霊が存在する事を確信し、精霊と人間界の交流の可能性を多くの著書に発表した。キリストによる救済は人間に精神的自由を再び与え、精霊との通信を実現して新しいエルサレムを創設し、そこで人間は卓越した智力を体得して神の領域に到達できる、と彼は主張した。カントは彼の神秘主義を夢想だと批判したが、スウェーデンボリの信奉者たちは「新エルサレム教会」を創立し、英国、アメリカ、スイスなどには今日でもこの団体が活動している。

20) Louis Claude Saint-Martin (1743-1803)：貴族の家に生れ、軍人となったが、1768年にフリーメイソンに入団、神秘思想に啓発され、ユダヤの神秘説カバラを研究、1771年に軍隊を退役して神秘主義の研究に没頭する。1775年に発表した処女作『誤謬と真理』*Des erreurs et de la vérité* は、コンディヤックの感覚論を批判したものである。その後フランス各地やイタリア、イギリスを旅行、1788年に訪れたストラスブールでドイツの友人からヤコブ・ベームの哲学を紹介された。大革命の間も政治には一切関与せず著述に没頭した。しかし1795年に発表した『友人への手紙またはフランス大革命に関する政治的、哲学的、宗教的考察』*Lettre à un ami ou Considérations politiques, philosophiques et religieuses sur la Révolution française*の中で、彼は、統治の理想的な形として神政政治を主張している。グノーシス派、ネオ・プラトニズム、カバラなどの色彩を帯びた彼の神秘思想はやがて誕生するロマン派に大きな影響を与える。

21) Teniers：ベルギーのフランドルの画家。父 David (1582-1649) はルーベンスに学びアントワープの画家組合長を務めた。注文による宗教画や歴史画や神話を題材にした大作を描いたが、風景画や田園生活を題材にした作品を好んだ。息子 David (1610-1690) もまた画家で父と同じくルーベンスに学び、1637年にはルーベンスが後見人になっていたアンヌ・ブリュエゲルと結婚した。彼女はあのブリュエゲル（1569年歿）の孫である。父と同じくアントワープの画家組合長を務め（1632-33）、オランダ総督ウィルヘルム大公（1614-62）の保護をうけ、彼の宮廷画家となり王室画廊の管理人を務めた。後にブリッセルに住みその地で歿した。彼は新鮮な色彩で風景画を創作し、父の作風を完成した。テキストにとりあげられたのは、この息子の David の方であろう。

22) Jean Baptiste Greuze (1725-1805) : 画家志願を始め家族に反対されたため、一人で努力しなければならなかった。1775 年のサロンに出品した彼の処女作は成功をおさめた。当時のナイーブな感傷にぴったり適合していたからである。イタリア滞在から帰国してディドロと知り合い、この文豪からその感傷主義を激励されている。パリ市民は彼が描く道徳情操豊かな甘美で感傷的作品を激賞したのである。彼はまた優れた肖像画家でもあった。代表作の「こわれたかめ」*Cruche Cassée* はルーヴル美術館に収蔵されている。

23) Louis Philippe, comte de Ségur (1753-1830) : 父と同じく軍人となり (1769), アメリカ独立戦争に参加, 帰国後は駐露大使としてサン・ペテルスブルグに派遣され (1784-94), きわめて有利な通商条約を締結, フランス, プロシャ, ロシアの三国同盟結成のため働いた。大革命に共鳴し, 1792 年にベルリンに派遣されプロシャが対フランス戦に参戦するのを防止する。ナポレオンは彼を重用し, 顧問官, 儀典長, 元老院議員に任命し伯爵に叙した (1813)。しかし彼はルイ 18 世と結び王政復古後も上院議員の職にとどまった。文学愛好者でヴォルテールや才媛のデファン夫人らと交際し, 劇作や回想録を残している。

24) Joseph Alexandre, vicomte de Ségur (1756-1805) : 前者の弟で兄と同じく軍人となり旅団長で退役し (1790), その後は文筆生活に入った。繊細な心理小説や戯曲や詩を創作し人気を得た。洒脱で陽気な社交人で上品な会話の名人として社交界の名物男だった。第一帝政時代の女性たちの生活を描写した『女性たち』*Les Femmes* 3 巻は好評で何度も版を重ねた。

25) 共和暦 3 年牧月 1, 2, 3 日 (1795 年 5 月 20, 21, 22 日) の暴動: パリ郊外地域の貧民層が飢餓と寒気の不満から国民公会へ対して起した暴動。ジャコバン派の煽動により決起した群衆は, 「パンよこせ, 1793 年の憲法を復活せよ, 政治犯を釈放せよ!」と連呼しつつ, 国民公会の議場に乱入した。乱入の寸前, チュイルリ宮の柵の前で代議士のフェロー (1764-1795) が暴徒の怒りを鎮め乱入を阻止しようとする, 彼らの一人が発砲したためフェローは即死した。デモ隊は彼の首を斬り落し槍に突き刺し議場に乱入, 制止する議長ボワシー・ダングラスの顔前に突き出して脅迫した。モンタニャール派の 6 名の代議士ロムやグージョঁらが暴徒に迎合し, 臨時政府の樹立を宣言する。しかし彼らが議論に時間を空費している間に, 国民公会は国民衛兵に出動を命じ議場を包囲させ暴動に加担した 6 名の議員を逮捕, 臨時政府の消滅を宣言したのである。この後の 2 日間は蜂起した民衆の居住地であるフォーブール・サン・タントワヌに国民衛兵軍を派遣して徹底な弾

圧を断行、数千名を収監した。また暴動に加担した旧公安委員会や保安委員会のメンバー、モンタニャール派の議員ら 13 名を逮捕し、処刑または国外追放をして、左派勢力を壊滅させたのである。この大弾圧の結果、パリの民衆蜂起は終熄し、以後 1830 年の 7 月革命の「栄光の 3 日間」までパリ市民は暴動に訴えることはなかった。逮捕された 6 人の議員は軍事委員会により死刑の判決をうけた（牧月 29 日、現在の暦で 6 月 17 日）。彼らは一本の短刀で互いに相手を刺して自殺を企てたが、ロムだけが死亡し、残り 5 名は重傷に喘ぎながら刑場に曳かれて行ったのである。

26) Féraud もしくは Ferraud (1764-1795. 5.20.) : オート・ピレネー県選出の代議士。彼はルイ 16 世の即時処刑を主張し、民衆が国民公会に提出した王政反対の請願書を公会に提示している。派遣委員としてピレネー方面軍に入り、前線に立って敢闘し何度も負傷する姿を見せて士気を鼓舞している。ジロンド派に同情的だった彼は熱月 9 日のロベスピエール打倒のクー・デタにはバラスと行を共にした。牧月 1 日の暴動の時、これに最も烈しく抵抗した議員の一人で、彼はデモ隊の正面に立ちふさがり、「私を殺せ、だが議会の自由を犯すな！」と叫んだ。フェローは入口に身を横たえ暴徒の乱入を阻止しようとした。しかし彼らはこの生きたバリケードを踏み越えて議場に向った。フェローは一人の士官と共に演壇を守ろうと暴徒と揉み合ったが、この士官がデモ隊の青年を殴り、殴られた青年が怒ってこの士官に発砲したのが誤って不幸にもフェローに命中したというのである。フェローは右派のリーダーでデモ隊が憎悪していたフェロンと間違われ、熱狂した暴徒の一人、ワイン商のリュック・ブーシェなる男がフェローの首を斬り落し槍に突き刺し、チュイルリ宮の周囲を行進してから議場に持ち込んだのである。首はその後パリ警視庁に届けられ、胴体とつながれ、牧月 14 日、国民公会が厳粛な葬儀を挙行了たのである。

27) 1793 年 6 月 24 日、国民公会によって制定された「1793 年憲法」は大革命の熱気を反映し国民の政治参加を重視した革新的憲法である。まず普通選挙制度の必要性を認め、人間本来の諸権利、平等、自由と教育及び生活のため社会から確かな保証を受ける個人的権利を承認している。またこの憲法は立法権（議会）が行政権（政府）に優越する事を規定し、立法に関しての発議権を国民の主権にある事を銘記している。

これに対して 1795 年 8 月 22 日、国民公会が制定した「1795 年憲法」即ち「共和暦 3 年憲法」は、前年のモンタニャール派の独裁体制の復活を防止し、ブルジョワ的共和政により恐怖政治的革命を終熄させる事を目的とした。そのため「1793 年憲法」の人民主権の色彩が払拭される。新しい議会は五百人会と元老院（定員 250 名）の 2 院で構成され

るが、五百人会の立候補者は30歳以上でかつ共和国内に10年以上住んでいなければならない、という制限がつけられた。元老院の候補者は2段階の投票で選出されるが、この第2段階の選挙人資格は直接納税者に限定される制限選挙制になったのである。更に行政権は、五百人会が候補者を選出し、元老院がその中から選出した5人の総裁による集団指導体制に委任される事となった。総裁は1年に1人ずつ改選され、五百人会議員は任期3年で立法権を有し、この法案の採否を3年毎に3分の1が改選される元老院が決定した。更にこの新議会体制の安定を狙って、国民公議員の3分の2が抽選でこの新議会に残留する措置がとられたのである。この事は、国民公会の独裁から解放されるという国民の期待に反し、特に近い将来での選挙での勝利を確信していた王党派の希望を粉碎した。この「共和暦3年憲法」は僅差で国民投票により承認されるが、これに不満を爆発させた王党派の叛乱がヴァンデルミール(葡萄月)13日に勃発するのである。

28) Louis XVII (1785-1795) : ルイ16世とマリ・アントワネットの次男で、3月27日にヴェルサイユ宮で誕生した。長男の兄 Louis-Joseph が、1789年6月4日ムードンで死亡したため、兄の跡を継いで同日に皇太子となる。1792年8月10日事件の後、彼は一家と共にタンブル塔に監禁される。父王ルイ16世の死(1793. 1.21.)と共に塔内で即位、ルイ17世となったと王党派は信じている。1793年7月3日、彼は母マリ・アントワネットから引き離され、国民公会によりアントワヌ・シモンなるジャコバン派の靴屋に預けられた。巷間に伝えられているような虐待を彼が皇太子に加えたという事実はなく、彼はルイを普通の家の子として扱ったという。しかし元来虚弱体質でリンパ腺結核に感染し、両親の悲業の死からの精神的ショックに耐えきれず、1795年6月8日午後3時頃、タンブル塔内で死亡したといわれる。僅か10歳の悲劇的人生だった。遺骸は6月10日フォーブル・サン・タントワヌの聖マルグリット教会の墓地に埋葬されたと伝えられている。しかし1816年に実施された発掘調査では埋葬の事実が確認されなかったため、それまでに流布していた皇太子生存説が再び話題を賑わすのである。我こそ皇太子だと名乗り出る者が30名余りも續出したが、勿論いずれも真っ赤な偽物であった。

29) Louis XVIII (1755-1824) : ルイ15世の皇太子ルイ・スタニスラス・グザヴィエとマリ・ジョゼフ・ド・サックスの子で、ルイ16世の弟として11月15日ヴェルサイユ宮で生れた。兄ルイ16世とその皇太子の死によりフランス国王となり、死亡した皇太子が本来ならばルイ17世になるべきだった事を考慮して、ルイ18世を名乗ったのである。皇太子の死の1795年6月8日からだが、当然ながら実体のない王政で、現実の国王となる

のは、ナポレオン殞落後の1814年4月6日以降である。彼はマリ・ジョゼフィーヌ・ルイズ・ド・サヴォワと1771年に結婚するが子供がなく、彼の死後、王位は弟のアルトワ伯シャルル・フィリップが継承し、シャルル10世と称する。

彼はヴォルテールに心酔した自由思想家で機智に富み、堅苦しく真面目な兄ルイ16世とはいささか毛色が変わっていた。三部会における第三身分部の人員を倍增する事に賛成し、1789年の大革命勃発に対しても距離を置いていた。10月5日、パリの民衆がヴェルサイユ宮に殺到し、国王一家を首都に連行した時は身を隠してなんの援助の手も差しのべなかった。この数週間に彼は国王代理に就任したい旨を表明するが、王妃マリ・アントワネットの強硬な反対にあって実現しなかった。最初は大革命の進展を他人事のように眺めていた彼も、革命運動が急速に激化するのに不安を感じ、国王一家がパリを脱出した同じ日（6月20日）に別の道を辿って無事にベルギーに亡命した。コブレンツで弟アルトワ伯と合流、亡命貴族や国内の王党派との協力を得て、王政復古の実現のために努力する。しかしながら国際情勢の変転が彼の王政復古運動を常に左右した。彼は後援者を求めてヨーロッパ各国を転々とするが、滞在した国の都合により退去を余儀なくされた事もあった。ナポレオンに屈しないイギリスが彼の最後の亡命地となる。やがてナポレオン帝国の崩壊と共に彼はイギリスの後援と皇帝に見切りをつけたフランスの政治家や軍人たちに支持され、念願の王政復古を実現する。1814年4月6日パリの元老院の帰国要請に応じ、彼は18年間に及んだ亡命生活に別れを告げ、カレーに上陸、5月3日パリに入城したのである。彼はその前日パリ郊外のサン・トゥアンで、基本的自由と議会制を維持する旨の、後の新憲法『憲章』*la Charte constitutionnelle*の骨格となる「サン・トゥアン宣言」を發表し、国王独裁の復活の意志のない事を明確にした。彼のこのような穏健さは平和が実現した象徴として、長い間戦乱に明け暮れた生活に疲れた庶民たちに歓迎され、彼のパリ入城は歓呼の嵐に包まれた。百日天下の後に第二回王政復古が実現しても、彼の穏健中正を本旨とする政治姿勢は変わらなかった。しかしこの賢明な君主も後継者としていた甥のベリー公爵が、1820年2月14日、熱狂的なナポレオン支持者の鞍職人ルーヴェルに暗殺されて以降は、周囲の過激王党派の意見に耳を傾けるようになった。そしてそれまでの穏健派のドカーズを解任し、過激王党派のヴィレールに組閣を命じるのである。彼は徐々に反動化し、絶対主義復活を夢見たが、専制君主になる前に歿した。

30) 共和暦4年葡萄月13日（1795年10月4日）の叛乱：前年の共和暦3年の憲法制定の際、復活して勢力拡大の上昇気流に乗った王党派が、五百人会と元老院の新議会の議員

選挙で圧勝するのを防止するため、国民公会はこの新議会の議員の3分の2を国民公会の現議員が抽選によって当たった者が引き継ぎ議員に留任し、残りの3分の1の議員のみを選挙するという法令を加えていた。この憲法は国民投票により僅差で承認されるが、この3分の2法案を絶対に承認できない王党派は暴力によって否認しようと葡萄月13日に決起した。パリのルペルチェ地区とフィュー・サン・トマ地区の住民を主力とする叛徒は、ダニカン将軍指揮の国民衛兵の一部の部隊と共に国民公会のいるチュイルリ宮を包囲したが、その数は二萬五千名に及んだという。国民公会はバラスにこの叛乱の鎮圧を命じ、彼はナポレオンに実戦の指揮を委ねた。戦闘は午後4時頃叛乱軍の主力が陣取るサン・ロック教会前面とカルーゼル広場周辺で開始された。ナポレオンはためらう事なく部下の砲兵隊に霰弾の一斉射撃を命じた。パリの市街戦で大砲が使用されたのはこの時が最初といわれる。霰弾の猛射を浴びた叛徒たちは総崩れとなり、多くの死体を放置して返却したのである。ナポレオンによれば死者負傷者それぞれ約二百名だという。最大の死傷者が出たのがサン・ロック教会の正面階段である。教会の柱や壁に現在でもその弾痕が残っている。叛乱は午後6時には完全に鎮圧され、その見事な指揮ぶりでナポレオンは一躍時の人となった。この暴動鎮圧が彼の皇帝への栄光の道の第一歩になる。

31) église Saint-Roch : 第1区から第8区に通じるサン・トノレ街286番地にある。1521年11月9日、サント・シュザンヌ・ド・ガイヨン礼拝堂 la chapelle de Sainte-Suzanne-de-Gaillon という小さな礼拝堂が、サン・ロックの丘の住民のために建立された。ガイヨン街(現在のサン・ロック街の一部)とサン・ルイ大通り(現在のサン・トノレ街の一部)の交差点の角にあったガイヨン館 hôtel de Gaillon の隣りにこの礼拝堂が建立されたのでこの名がつけられた。寄進主は富裕な家畜商ロネー殿ジャン・ディノショーである。この礼拝堂はサン・ジェルマン・ロクセロワ教会の監督下に入った。1577年11月13日、寄進者の甥エチエンヌ・ディノショーが土地を寄付したため、この礼拝堂はそれを機に、主管のロクセロワ教会の礼拝堂の一つに祭られている聖ロックの名をとり、サン・ロック礼拝堂と改称した。というのも、当時ビュット丘一带とムラン地区にペストが蔓延する危険が増大していたため、ペスト予防と治療に多くの奇蹟をおこしたと伝えられている聖者ロックの功德にあやかうとしたのである。聖ロックは1295年モンベリエに生れ、自分の財産を貧者に施した後、イタリアに巡礼しその地のペスト患者の治療に当たった。やがて自分もペストにかかり、独り荒野に身を隠したが、一匹の犬が毎日彼の元になにがしかの食糧を運んできた。聖ロックは犬の飼主に発見され手厚い介護をうけて全快するが、その

日から聖ロックが赴く土地ではベストが退散したと伝えられている。この礼拝堂の位置は現在の教会の袖廊あたりとみられる。

1622年に初代のバリ大司教ジャン・フランソワ・ド・ゴンディの妹メニユレ伯夫人マルグリットがガイオン館を買収し、旧礼拝堂を取り壊し、独立した教区を管轄できる教会を建立するための土地を提供した。教区は1633年6月30日に認可される。建設はルーヴル宮やパレ・カルディナルを手掛けた名建築家ジャック・ルメルシエ(1585-1654)があたる事になる。1653年3月28日、ルイ14世が自ら教会の礎石を据えた。この教会は実現すればノートル・ダム大寺院に匹敵するバリ最大の教会の一つになる予定だった。しかしながら上棟式の華々しさに反し、建設資金がすぐに枯渇し、建設は長い間中断し、教会は目隠しの板塀で囲われたままだった。工事が再開されたのは1705年だが、本格的に進行ししたのは1719年からで、これは銀行家ジョン・ローが10万リーヴルの巨額な資金を奉納してくれたからである。彼は新教を棄て旧教に改宗し、このサン・ロック教会で初聖体を拝受している。1736年3月1日、教会の正面入口が完成するが、この正面玄関はロベール・ド・コット(1656-1735)の手になるもので、設計はこの前年に死去した彼の父であった。彼は1740年にこの教会を落成させ、7月10日に奉獻式が挙行されて正式の教会として公認された。サン・ロック教会には四階立ての四角い塔の鐘楼があったが、1875年に老朽化とピラミッド街への通路拡張のため取り壊され、それ以後再建されていないので、この教会は鐘楼を持たないのである。

18世紀を通じて、この教会は人気の的となっていたため、多くの有名人が埋葬されている。例をあげると、劇作家ピエール・コルネイユ(78歳で1684年歿)、画家で造園家のアンドレ・ル・ノートル(87歳で1700年歿)、ルイ14世の娘マリ・アンヌ・ド・ブルボン(73歳で1739年歿)、ジョフラン夫人(78歳で1777年歿)、ディドロ(71歳で1784年歿)、グラス提督(65歳で1788年歿)などである。モー司教ボシュエ(1627-1704)の葬儀はこの教会で営まれた後、モーに埋葬されている。モリエールは我が子をこの教会で洗礼させているし、ジョフラン夫人は結婚式を挙行しており、ナポレオンの戴冠式のためパリに来訪したローマ法王ピオ7世はここでミサをとり行っている。またラコルデール(1802-1861)が、1833年5月3日に説教師としてデビューしたのもこの教会であった。オペラ座の踊り子や女優たちの葬儀や埋葬で司祭同士の争いが勃発したこともあり、とかく話の種に事欠くことはなかった。

大革命の初期に、ある実業家がこの教会を買収し、袖廊を貫通して道をつくり、側廊は



そのままにしてそこに商店街をつくりたいと提案したが、幸いにもこの提案は否認された。この教会には多くの名画や彫刻の傑作が展示されているが、1848年2月24日の革命の時、エコル・ポリテクニクの学生たちが団結して、乱入した暴徒の掠奪からこれらの文化財を死守した事は、この教会の歴史上の快挙であった。

（續　く）

（追　記）

- （１）参考図書などは、〔Ⅰ〕の巻末に掲載してありますので、そちらを御参照下さい。  
（２）前稿〔XVI〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

- p. 3. 下から 15 行目　ボワシー・ダングラス  
p.16. 上から 6 行目　公教育委員となり  
p.23. 下から 15 行目　政治の蔭に